

3 思考活動を保障するユニバーサルデザインの授業づくりの実際

「ミュージカル『さるかに』を成功させよう（第4学年）」

（１）育成したい「思考力」と思考に必要な要素

【単元で育成したい「思考力」】

歌詞の内容や曲想を基に、鑑賞している人に登場人物の心情が伝わるように自分たちの思いや意図をもって歌唱表現を工夫する力

思考活動

知識・技能

顔の表情は、歌唱表現と深く関わりがあることを知り、そのことを歌唱表現に用いることができる。

本単元では、鑑賞する人に自分の配役の心情が伝わるように、自分たちの思いや意図をもった歌唱表現の工夫ができるようになることを目指した。なぜなら、顔の表情を付けることで、登場人物の心情がより表出しやすくなると考えるからである。これは学習指導要領の中学年「A 表現」（１）の指導事項「イ 歌詞の内容、曲想にふさわしい表現を工夫し、思いや意図をもって歌うこと」に該当する。

本「思考力」育成には、上記「知識・技能」が必要となる。本単元で行うミュージカルでは、楽曲の中で担当する短い台詞を歌に表し、登場人物の心情を表現しなければならない。そのためは、既習の歌唱表現以上に聴き手の立場を意識し、より伝わりやすい表現にしていく必要がある。その際に、この「知識・技能」があれば、子どもたちが自らの感性や創造性を発揮しながら、ミュージカルにふさわしい歌唱表現をつくりだすことができると考える。

（２）本実践におけるユニバーサルデザインの授業づくりと詳細

授業づくり	実践の詳細
<学習問題の設定> 発表会でミュージカル『さるかに』を行うことを伝え、登場人物の気持ちが伝わるような歌い方の工夫を考えたいという意欲をもたせた。	自分のもち歌をどのように工夫すればよいかということについて、楽譜や歌詞を手がかりに個々に考える場を設定した。
<「知識・技能」への働きかけ> ○ 想定されたつまずき - ミュージカルにおける歌唱表現の仕方がわからない。 - ミュージカルの歌唱においては、顔の表情を伴うことで声の表情も豊かになり、登場人物の心情を豊かに	子どもたちが初めて取り組むミュージカルのイメージを描きやすいように、『サウンド・オブ・ミュージック』のDVDを鑑賞させた。しかし、ミュージカル表現の工夫は、動作を付けたり踊ったりすることと捉えてしまい、歌唱表現の工夫に意識が向いていない子どもの実態が見られた。また、歌唱部分は楽曲中の１フレーズと短いため、登場人物の心情を十分

表現できることに気付いていない。

○ 働きかけ

- 顔の表情と声の表情の関連に気付かせるため、鏡を見ながら、例えば明るい歌声とさまざまな顔の表情を対応させた（主：配列・作業化）。



【顔の表情と声の表情の関係に気付く場】

- 顔と声の表情の関連について、気付いたことを表にまとめ、板書上に位置づけた（補：配列・作業化）。

	家庭教師に行く前の不安なマリア	自信をもとうと決意したマリア
声	・暗い ・不安 ・泣きそう ・しずか	・楽しそう ・元気 ・自信のある声 ・はずんでいる ・勇気が出そう
顔		

【顔と声の表情の関係を表で比較する】

に表現できていない実態がみられた。

そこで、DVDの映像から暗くて不安そうな歌声と、元気で自信が伝わってくる歌声の場面を振り返らせた。すると、それぞれ顔と声の表情が一致していることに気付いた。この気付きを自分たちが演じる『さるかに』の歌唱表現にも用いることができるかどうか、個々に鏡を持ち、顔と声の表情を対応させながら確認していった。以下は、『サウンド・オブ・ミュージック』の劇中歌「何でも任せて」という明るい歌声に合わせて三つの表情を当てはめている時の反応である。

T：「何でも任せて」は、自信がある明るい声ですね。では、声は明るく、顔は不安そうな表情で歌ってみよう。

C：えーっ、合わない。

T：じゃあ、声は明るく、顔は表情なしで歌ってみようか。

C1：んー、これも違う。（首をかしげている児童が多い）

T：顔も声も明るくしてみようか。

C2：これが一番ぴったり。（うなずいている児童が多い）

子どもたちは、実際に鏡で自分の表情を確かめながら歌うことで、顔と声の表情が異なる時には違和感があることを感じていた。

ほとんどの子どもたちが明るい曲調の時には顔も声も明るくすればよいことを実感できていた。しかし、鏡を用いての確認は、明るい曲調のみだったため、不安や暗い気持ちを表した場合についても、顔と声の表情の関係を表にまとめた。そうすることで、登場人物の気持ちに応じて、顔と声の表情を一致させればよいことを実感し、『さるかに』での歌唱表現の工夫にも生かせようだという見通しをもつことができた（教材の価値を共有化）。

＜個々の考えを関わらせる場＞

4人一役で演じるため、グループに一つずつ鏡を用意し、4人同時に鏡に映った表情を確認し合ったり、歌声を聴き合ったりする場を設定した。このときの顔

個々の考えを記入したワークシートを基に、同じ配役の友達同士で歌声を確認し合った。それぞれが異なる工夫をすると、伝えたい心情が異なってしまうため、顔と声の表情を一致させやすいように、グループで一つの大きな鏡を用いた。しかし、顔の表

や声の表情について吟味していくことで、登場人物の心情に迫る歌唱表現の工夫を追求していくことができると考えた。	情を一致させることに時間がかかりすぎてしまい、声の表情と関連づけて確認し合う意識が薄れてしまったグループも見られた。 【四人で顔の表情を確認する】
＜「知識・技能」への働きかけ＞ ○ 働きかけ ・ 歌唱の工夫前後の映像を提示し、工夫のよさを客観的に振り返った。 (補：配列・作業化) 【歌唱表現の工夫前後を映像で比較する】	歌唱表現を工夫した後にビデオ撮影し、前時に撮影していた歌唱表現の工夫前の映像と比較した。すると、以下のような反応が表出された。 高1児：同じ言葉を3回も繰り返していて、だんだん音が高くなるので、1回目よりも2回目、3回目とだんだん強調して歌ったらしい。 低2児：自分の役を歌で表現するためには、もっと力強く歌わないといけない。 自分では工夫しているつもりでも、聴く側の立場から自分の歌唱表現を客観的に振り返ると、「思考力」高位群の子どもも低位群の子どもも、自分にはまだ課題があると気づき、次時以降の工夫につなげていくことができた。

(3) 成果と課題

① 量的な検証

本実践の前後でテスト（14点満点）を行い、「思考力」の伸びを検証した。その結果、平均点で1.07点向上した。この差についてt検定を行ったところ、有意差が認められた〔 $t(36)=3.10, p<.01$ 〕。このことから、本実践を通し「思考力」の向上が図られたと言える。

② 考察

鏡を用いて顔と声の表情の関係を確認した直後、補完的な働きかけとして他の感情を表す歌声についても表にまとめ、板書上に位置づけた。このように働きかけを連続して行うことにより、子どもたちは『さるかに』に出てくる喜びや怒り等、登場人物のさまざまな心情を顔や声の表情を工夫することで表せそうだという見通しをもつことができた。

しかし、学び合いにおいて、4人で鏡を用いる必要性を感じ取らせるための手だてが薄かったため、顔と声の表情を一致させると良さそうだという授業前半での気づきを歌声に十分反映させることができなかった。歌う子ども、観客の立場で聴く子どもといった役割を設定して交流させることで、学び合いをより活性化することができたのではないかと考える。